

■大震災からの農業・農村の復興に関する技術シンポジウム

12月7日（水）10:30～16:30、東北大学百周年記念会館川内萩ホール（仙台市）にて、標記シンポジウムを開催しました。

堀江理事長の主催者挨拶に続き、郡和子宮城現地対策本部長、東北農政局 佐藤憲雄局長、宮城県農林水産部 菊地良雄部次長による後援者挨拶があり、未曾有の天災による被害状況と復興の進捗状況、先導的な農業技術に対する期待等が述べられました。

農工研からは、毛利栄征施設工学研究領域長が、農地を津波減勢エリアとして利用する「減災農地」の概念を報告しました。

パネルディスカッションでは、農地の除塩方法、暗渠の必要性、農地基盤の復旧・復興にあたっての合意形成、地下灌漑システムの適用可能性等、フロアを交えて議論が交わされました。

たくさんの方にご参加頂きましたことを、厚く御礼申し上げます。



報告会への外部参加者425名の内訳を図1に示します。民間企業の方が最も多く、28%を占め、続いて県、独法の順でした。

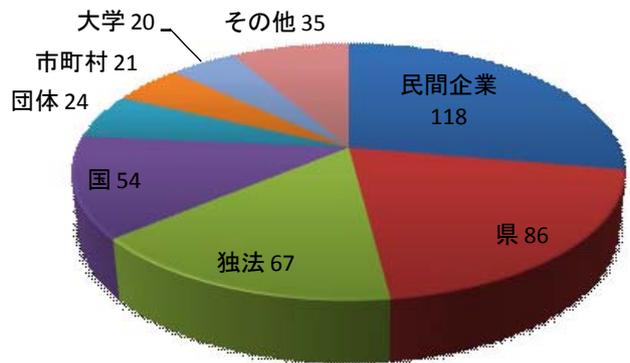


図1：参加者数の内訳

参加者の方へのアンケート結果をご紹介します。

図2は、キーワードについての回答（複数回答可）です。「塩害」「農業施設の整備」、「農業施設の被害」といった農業基盤への関心が高く、続いて「地域社会の維持」となっています。

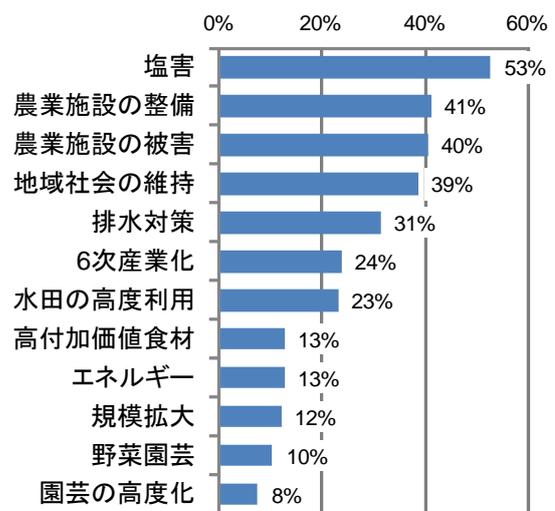


図2：注目されたキーワードは？

シンポジウムの印象を伺ったところ、これまでの催事と比較すると「ふつう」、「やや悪い」がやや目立つ結果でした（図3）。

最後に、自由記入欄へ寄せられたコメントのいくつかをご紹介します。

- ・自然と農漁業が調和した農村を戻したいと思います。
- ・現場の方の話も聞きたかった。
- ・テーマが広範囲で、説明時間が短い。

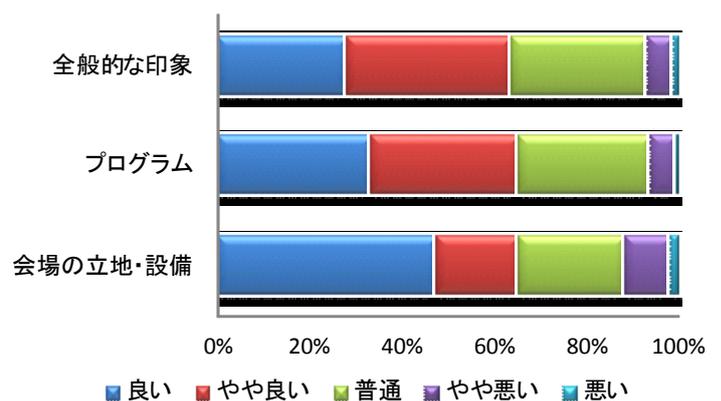


図3：シンポジウムの印象は？

頂いたご意見を農研機構の今後の取り組みに活かすとともに、被災地が一日でも早く復旧・復興するよう、技術支援を続けて参ります。